

(書評) 『生と性、女はたたかう——北山郁子著作集』  
別所興一編、風媒社、2017年7月

檜 村 愛 子

本書は、本学元教員で本研究所所員の別所興一が、2017年7月に編集した、渥美地域の社会運動・女性運動の中心人物、北山郁子の著作集である。

別所興一は、時習館高校の社会科教員を経て、愛大で社会科教育法と日本史の講座を担当した。彼が時習館高校赴任時に育てた若者への地域的影響力は大きい。退職後の現在も、生地の田原でライフワークとしての地域のネットワークメディアを企画・運営しつつある。本書の編集は彼のライフワークとしての郷土史の発掘の活動の一環でもある。

本書には、北山郁子をはじめた反公害運動のいきさつや、当時の地域政治運動の核となっていた杉浦明平や夫との活動が詳細に描かれ、その点で歴史的証言となっている。この地域が、反公害運動（中部電力渥美火力発電所増設反対運動）の署名活動に見られるように、火がつくと激しい運動が展開される様子や、一方で、10年間、町を二分したこの運動が札東の力で敗北し町民に疲れていく様子など、地域運動史資料としても重要であり、杉浦明平研究第一人者としての別所にとっても重要なものであっただろう。

また、北山郁子は、巻末の短歌に見るように、文学者として政治活動にのめり込んだ杉浦明平の影響もあって、1960年代から文学活動に関わっている。彼女の杉浦明平についてのエッセイにおける人間観察は鋭く、自身

の家庭や父母についての描写にも文学的な力がかがえる。

筆者は、宮本百合子や林芙美子が好きだという自分を、杉浦明平は浅薄にしか捉えなかったと語る。フェミニズム第二波であるリブの運動のモットーは、「個人的なことは政治的なこと」であり、しかも北山郁子はセクシュアリティを問題にしていたのであり、「共産主義によるブルジョワ女性批判」と「リブ運動」のすれ違いの歴史的出来事がここには表れている。

北山郁子は、1926年富山に生まれ、医者となり、インターン時代に知り合った、同じく医者である夫と共に、地域医療に身を捧げるべく、渥美へとやってきた。そして、最初は夫を支える内科医（現実には、インターン直後で夫と比べて経験もないだけでなく、保守的で女性の地位の低い田舎の農村で、女性の医者であるため信頼されなかった）として、さらにのちには勉学を経て産婦人科医として、地域の女性たちを底辺から支え続けてきた。

北山郁子には、『女医の診察室から——渥美半島に生きて』や自選歌集『鄙の半島』などの著作がすでにあるが、本書はそれに続く著作集で、東三女医懇話会誌『如月』、『東海日日新聞』、『婦人民主新聞』、『思想の科学』、文芸同人誌『海風』等々に掲載された評論や短歌を別所が編集したものである。巻末には

別所による、北山郁子と当時の歴史的・社会的状況や運動の文脈についての詳細な解説がある。

この書の最も力強いメッセージは、当時女性に対してより保守的だったこの農村地域に入ってきた彼女が、(杉浦を中心とする)戦後の共産党の活動が地域にありながら、「ブルジョワ的」とされ孤独のうちにあったこと(「村はよそものに対し好奇心が強く、家の中のことはすべて知れわたってしまう。『先生はいい人だが、あの奥さんはなんだ——』とわざと聞こえるように噂する。一定の噂を作り上げると、みんなは同じ目を見た。一人の人間としてではなく、奥さんとしてしか人々は接しない。」101p)、しかしそれを乗り越えて、産婦人科としてスタートし、さらには、身体の健康の重要性の自覚を通じて反公害運動の重要性を認識してこれを担い、彼女自身、地域に根差すようになり、女たちの証言を聞く中で、女の身体と性を尊重するということの重要性を確信し、性教育活動を押し進めていった、一連の経緯の中に現れている。すなわち、リブの運動の証言に見られるように、本人自身のサバイバルの記述、本人が地域に押しつぶされそうになりうつむいて歩くしかなかった孤独な状態から、一念発起し、夫の内科を手伝うことをやめて産婦人科を再度目指し直した、強い意志を伴い道を切り開いていった具体的な姿の記述にある。それは、本人を撮ったドキュメンタリー映画(後述)の本人のたたずまいと呼応するような、本書の文体の力強さや情熱において現れている。それはこの映画の監督の証言にあるように、年齢を感じさせないものでもある。

北山郁子には、2012年に山上千恵子監督によるドキュメンタリー映画『潮風の村から——ある女性医師の軌跡——』があり、その上映活動自体、地域の女性たちが集い、地域における女性のあり方を見つめる、大きなイベントとなった(なお本書には、山上監督に

よる、刊行によせた証言も収められている)。女性たちのありのままの生きざまを見つめるドキュメンタリーがそのまま女性運動の歴史的証言となることについては、2014年に発売され全国で上映されているリブの記録証言映画『何を怖れる—フェミニズムを生きた女たち』においても周知であり、一人一人の生きざまが運動として続く女性たちへのメッセージとなっていることがよくわかる。現在最も大きな影響力を持つ女性NPO、WANの上野千鶴子は、本人の語るように、リブを立ち上げた田中美津に励まされてフェミニストとして続き、田中なしに彼女のフェミニズム運動は存在しなかった経緯をもつ。

映画では北山郁子の渥美での反公害運動(中部電力渥美火力発電所増設反対運動)を自ら立ち上げた様子も、当時のメンバーたちとの回顧も含め生き生きと描かれているが、彼女がもっとも中心とした活動は性教育であり、彼女の影響を受けたさまざまな人々の証言がそこには収められている。また、映画には、渥美半島で地域活動を担っている、フリースクールゆずりは学園での北山の講演活動や、学園の匿名夫婦と学園に通う子どもたちの様子、また、彼女がかかわる渥美の女性運動グループの女性たちの証言も描かれており、地域の社会活動の歴史的ドキュメンタリーともなっている。

本書は、この映画の裏地となるような、北山郁子のより詳しい証言が集められている。北欧視察で目の当たりにした先進的な性教育にどのように彼女が眼を見開かれ、それを日本に大胆に勇気をもって導入しようとしたかが描かれている。しかし、山上監督の証言にもあるが、彼女はもともと性に対してオープンな大らかな女性であり、渥美に来たときに「よしろう」「いくこ」と呼び捨て合う夫婦が、この保守的ですべてが筒抜けで噂になる農村でいかにスキャンダラスであったかもわかる。おそらくそれは農民運動の専従者であっ

た父のもと、始終多くの人が集う環境のもとで自由に育った、彼女の生育環境によるものでもあるだろうし、一方、そのような環境で、おとなしくて小姑にいじめられた母を見て育ち、とはいえ自分は生意気だったため、おばたちによくたたかれ、家にはいたくなく学校で勉強したくて、また当時は戦争中で理科系しか学校に残れなかったため医者になつたとする、彼女の強い意志のなすわざであったかもしれない。

残念ながら昨今、自由で開かれた性教育への反動やバッシングの中で、彼女の活動は制限されるようになってしまった。厚労省が作った先進的な性教育教材が文科省によって配布を停止された様子を彼女は残念そうに語っている。それでも、ひるむことは全くないし、発言は全くぶれない。性教育の必要性への信念は今も一貫している。

同じようにたくましい地域の女医と言えば、戦争体験証言者としても活躍してきた弥生病院の眼科医の渡辺のり子（現豊橋市教育委員）を想起するが、実際、本書に助力した者として彼女の名前もあとがきに現れる。なお、北山郁子も戦争体験者である。

また名古屋では「私たちは『買われた』展」の共催者となった、産婦人科医、咲江レディースクリニックの丹波咲江も性教育の啓蒙や性の相談など精力的に活動している。女性の身体への暴力の現場だからである（なお男性では、南生協病院産婦人科田中勤が、NGO少年支援保健委員会で、2007年から名古屋の栄で深夜徘徊する子どもたちの相談活動を行っている。性の問題はリブが提起したように、生の主要な問題である。）。

渥美の女性運動の土壌があるのは杉浦や郁子らの地域で持続的・長期的な社会活動によるものであることは、豊橋の厚みのある反原発運動がチェルノブイリ以降、持続的・長期的に元愛大経済学部の田中良明が地域住民と重ねてきた勉強会の活動によるものであり、

地域に社会的な意識の高い教員の活動が今もあるのは、やはり元愛大経済学部の安井俊夫の地域の教員たちと重ねてきた勉強会の活動にあるゆえであることを想起させる。今言われる「地域と大学の連携」という、表層的な関係を指すものよりもっと知的で地道な活動は、歴史的に存在している。

なお、短歌をめぐる杉浦と北山のやりとりに、別所は、両者の関係の葛藤と和解の感情を読み取っている。また、北山の、夫への同志的愛情や夫を亡くした悲しみや寂しさ、今の政治に対する怒りなどが詠まれ、そこには力強い感情が読み取れる（「青春時代にこの里に来て六十年夫は村人を愛して逝けり」「五十年前の夫言えり『この地で僕が斃れたら続くんだよ君が』」「思春期に戦を知りしわれならば日本の首相よあまりに愚かし」等）。杉浦明平とともに、社会活動と文学（短歌）の関係を考察する重要な資料となっている。

